

クリの台木適性

岩谷章生・藤丸 治<sup>1)</sup>

(熊本県農業研究センター球磨農業研究所・<sup>1)</sup> 熊本県農業研究センター果樹研究所)

Akio Iwatani and Osamu Fujimaru :  
Variety Matching of Chestnut Budwoods with Rootstocks

クリの苗木生産は、通常「筑波」の種子からの実生に接ぎ木して行うが、使用される種子の品種によって生育や着穂に差が生じるかは明らかにされていない。そこで、熊本県の主要品種に対し、適性の台木品種を選定することを目的として、台木の品種が及ぼす苗木の生育、収量および果実品質への影響を調査した。

1. 材料および方法

試験は熊本県人吉市現地圃の2か所で行った。土壌条件は両圃とも褐色森林土(壤質)であり、傾斜は圃地(1)が15~25%、圃地(2)が5~10%であった。穂木品種と台木品種の組み合わせは第1表のとおりで、接ぎ木不親和の有無、幹周、樹冠面積、結果母枝長、着穂数、果実品質について調査した。

2. 結果および考察

1) 接ぎ木部異常: どの区においてもみられなかった。

2) 樹体生育: 柴栗系台の「丹沢」で両圃とも樹冠面積の拡大、結果母枝長がやや劣る傾向にあった(第2表)。この傾向は9年生から10年生にかけてみられた。他の区では個体ごとに樹勢の強弱はあるものの、台木別で一定の傾向はみられなかった。

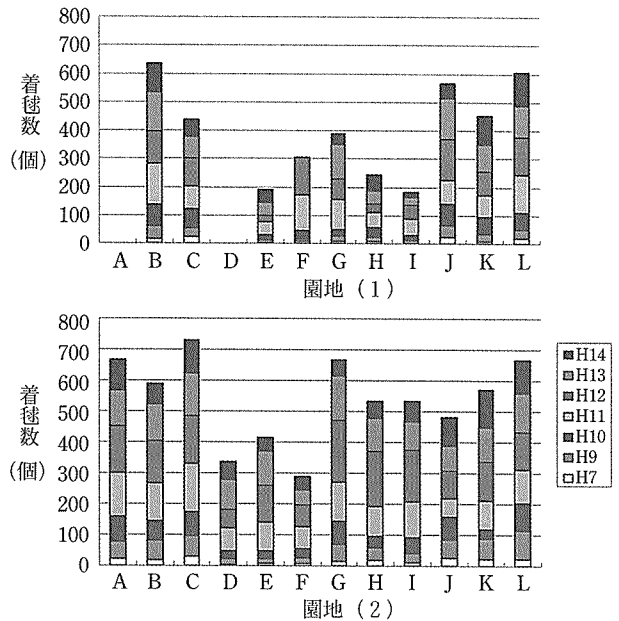
3) 着穂と果実品質: 着穂数は試験期間を通して調査したが、一定の傾向はみられなかった(第1図)。果実品質は2001年、2002年の2か年間試験を行ったが、一定の傾向はみられなかった(表略)。

以上の結果から、台木のために使用する種子の品種間で苗木の生育や果実品質に一定の傾向はみられなかったため、使用する種子の品種を選ぶ必要はないと思われる。柴栗系台木に供試した、「丹沢」の樹勢が弱くなる傾向がみられたが、柴栗は品種として固定されたものではないため、柴栗全てがこの傾向を持つのかは不明である。

第1表 穂木品種と台木品種の組み合わせ

台木	穂木の品種		
	筑波 /	丹沢 /	国見 /
筑波系	A 筑波 / 筑波	D 丹沢 / 筑波	J 国見 / 筑波
銀寄系		E 丹沢 / 銀寄	K 国見 / 銀寄
岸根系		F 丹沢 / 岸根	L 国見 / 岸根
石鎚系	B 筑波 / 石鎚	G 丹沢 / 石鎚	
柴栗系		H 丹沢 / 柴栗	
利平系	C 筑波 / 利平	I 丹沢 / 利平	

注) 供試台木は、それぞれの品種を母方にした雑種であるため、一系とした。



第1図 着穂の累積数

第2表 10年生樹の樹体生育

圃地 (1)			
区	主幹径 (mm)	樹冠面積 (㎡)	結果母枝長 (cm)
B	159	17.3	46.4
C	178	18.9	46.0
D	153	12.1	46.0
E	154	13.2	42.8
G	191	17.7	49.7
H	162	11.0	43.0
I	148	13.2	35.6
J	145	15.6	40.0
K	148	15.6	59.2
L	136	13.9	39.7
圃地 (2)			
区	主幹径 (mm)	樹冠面積 (㎡)	結果母枝長 (cm)
A	196	18.7	50.5
B	203	17.1	52.1
C	220	23.8	46.1
D	205	21.8	57.5
E	224	20.5	43.8
F	236	24.9	46.0
G	213	28.7	46.8
H	189	17.7	40.3
I	232	25.5	42.3
J	156	12.6	46.0
K	186	20.1	50.6
L	181	20.7	47.3